

## ■太巻きずしの文様がつくられる背景

昔はすしつけの名人というのが村にいまして、男の仕事でした。男性のみが巻いていて、女性はお使い役でした。「おい、カンピョウ持って来い。」とか、「海苔持って来い。」とか威張っているんですよ。女性は「はいはい。」と言って、一生懸命巻いているところへ運ぶのです。巻けるとそれがポイっと出されるので、それを隣の部屋へ持って行き、切ってお皿に盛り付けるのが女の人の役目でした。そういう性格のものだったのですが、戦争を境にして名人達がみんな亡くなってしまい、世襲でしたが戦争で子供達を亡くした人が多く、結局、男の手には残らなかったのです。全部女性が見て覚えたのを復活させました。それが昭和 25 年頃です。大多喜地方の農家の女性が復活させようと言って、自分の記憶を辿って作り上げたのが現在の太巻きずしです。ですから決してカビが生える程の古い技術でもないわけです。男の人が巻いていた文様というのは全部残っているのですが、大したものではないです。やさしいものだけ女の人は盗み見して覚えたんですね。それが戦後、県内にいっせいに広がりました。地域によって巻くものが全く違っていました。女性が中心になって新しい文様が生まれているのです。これは非常に大事なことだと思います。例えば、海苔巻きには“ダイヤモンド”という巻き方があります。素晴らしい発想だと思うのですが、これは“金色夜叉”という小説を読んで、「お宮じゃないけれど、おいらだってダイヤモンドが欲しい。」と、夫にダイヤモンドをねだったら、「何で百姓にダイヤモンドがいるんだ。そんなものいらない。」と言われて、悔しいから巻いたと言いました。みんなそういうストーリーがあります。それは教養のある人でないとできない発想ですね。例えば JAL のマーク、あの鶴丸を巻いた人は、東金高女を出て教員をしていた方です。ですから横文字も多少読める人なのですが、畑の上を飛んでいる飛行機を見て、あれをどうしても巻いてみたいとずっと考えていて、夜中にハッと思い、飛び起きて台所へ行ってお櫃の中に残っていた冷や飯を使って巻いたと申してました。要するに、教養のある人でないと、こういうことはできないのです。いろいろな文様が生まれましたが、それらの作者は私の著書の『後世に伝えたい創作・考案記録』に書いてあります。